

鉄道、あるいは旧道

——地域の物語と身体の移動と——

野 村 典 彦

一、聞くことを意識させた鉄道の開業

『安房の傳説』（羽山常太郎編輯・発行所は京房通報社・発行者は羽山常太郎）は大正六年七月に七拾錢で出版されている。現在では内房線と呼ばれる鉄道が安房北條（現・館山）駅まで延長されるのは大正八年五月。^{（注1）}『安房の傳説』が発行されたのは、上総湊まで、

浜金谷まで、と上総を南下していった鉄道路線が、鋸山にトンネルを穿つて安房勝山に延伸される直前である。

けれどけれど、聞けば間もなくいかすかぬ汽車といふものが、こゝにも扈び^はつて来るさうな。そしたら、のどやかな山の朝雲は、あの毒々しい煙にかき濁されて丁うでせう。そしたら、おご^{（注2）}そかな海の落日は、あの騒々しい響きにかき素^{あわ}されて丁うでせう。海の青さ、空の青さ、せめてうまれ故郷の安房だけは、神世のすがたそのまゝにと冀んでゐた私のねがひも、こゝにむなしく覆されねばならなくなりました。これからさき、私らは

いづこ尋ねて、優にやさしい自然のふところに抱かれながら、人の情といふものを、しみじみ考へられるのかしら、それも時に一つ、ましい農人たちの胸にながくふかく秘められて生きてきた傳説、あらくれな漁夫たちの唇にまで哀れうつくしうものがたられる奇蹟、それらの房州風物記をあどけない筆で急ぎませう。

目次と口絵とを挿んで、この「冠詞」に続く「第一編 安房の傳説」の一つめは、「特に房州遍路者に」と副題が施された「朝寝の観音」である。「この傳説を書くに先き立つて、是非とも安房は三十四番の札所の道しるべを記して置きたいと思ふ」と筆を起こし、「一番は那古の那古寺」から「三十四番の長狭の大山寺」までを二十八頁にわたって述る。二つめの伝説「御狩ヶ谷」では、「一たびとほい己のが姓のよつて來つたところを研究して見るならば、きつと複雑なそしてしかも面白い、それぞれゆかりの古典をば發見するで

たいと思つてゐた」との立場を表明する。伝説を紹介する手始めに、二本の脚による安房の国の一巡を素描し、姓の由来を掘り起こす必要があつた。故郷の伝説を記述する章の導入で示されている伝承に向き合う態度は、私達が郷土史家と呼ばれる人達から話を聞く際に感じるそれと大きく異なるものではない。

「科學といふものゝ知識がやうやく發達して行くにつれ、ながく久しく人々の唇のうへに生きてきた奇蹟や口碑やがおもむきなう附會されて、あたら自然のゆたかな情趣がくだかれてしまふその口惜しさ」（火を吐く島）^(注3)を最もわかり易い姿でうまれ故郷に運び込むものが「毒々しい煙」「騒々しい響き」を伴う「汽車」であると編者羽山が感じていたのは間違いあるまい。「単に鉄道に対する無知による反対は、明治二十年以降は存在する可能性は低いと思われる」^(注5)にも関わらず鉄道忌避伝説を各地に生み出した人々の心情も、こうした記述と擦り合わせてみれば理解しやすい。

けれども、こうした「解けどいつかな解けぬしひな傳説も、あらない物質文化の凶刃にほふられて、ふしぎな世界を夢みることをゆるしては呉れぬ」（火を吐く島）^(注6)と表される「亡び行くローマンス」（同）に対する感傷のみに目を奪われてはならない。四二五まで頁数のふられたこの伝説集は四二六頁めが奥付になるが、その後、裏表紙見返しまで六十數頁にわたつて広告を掲載する。約百件のうち旅館が三割を越え、医院も四分の一を占める（医院の広告のいくつかには「轉地御療養患者入院の需に應ず」とある）。また

〔第四編 安房の俚諺〕〔第五編 安房の民謡〕の前に、「第一編

安房案内記」として、汽船、鉄道、連絡自動車、乗合馬車、人力車、通信機関、旅館等の時刻や料金、所在地を十四頁にわたつて案内^(注9)、「第三編 名勝と舊蹟と」を町村ごとに列記する。この章は汽船で北條海岸に上陸する乗客の視点で書き起こされ、各町村の見出しには北條からの距離がそれぞれ示されている。「第二編」の通

信機関の項では「房州以内の通話料は、一通話（五分間）五錢以上二十錢である。それは東京市内に於けると異つて、全じ房州以内でも、その里数によつて計算せられるのである」と、汽船により房州を訪ねる東京の読者を強く意識している。鉄道に対するあからさまな嫌悪を示しながらも、「謂ゆる鐵道網の網の目から濬れ得たのは幸か不幸か、兎も角くも煤煙に汚されぬ山海の、古ながらの清い尊い姿は、我等にとつては何よりの賜である」（第三編）と美しい安房へ人々を積極的に誘うのである。それは、海や温暖な気候を資源に拡大していく房州の觀光と、海沿いに房総半島を一回りしようとする鉄道路線の拡大とに触発された名勝の生産であつた。^(注10)

ところで、鉄道によつて自然のゆたかな情趣が失わることを素直には受け入れられない心情と、東京の人々を故郷安房へいざなう意欲とが交錯するところに出版された『安房の傳説』なのではあるが、記述の基調をなす、汽船による旅に用意されているそのまなざしは、鉄道の車窓に風景を発見する旅客のそれとは明らかに性質を異にする。〔第一編〕の伝説の紹介では、靈岸島から船路房州へ向かう旅人の視線が活かされている。「もし房州へと旅ゆく人々が、保田の港に汽船を乗りすて、馬車にゆられながら北條へとこゝろ

ざ、ば、ぜひ通らねばならぬ茶屋の宿でそれと知られた野房地先きの松林その路はづれ、ひだりの窓から手をかざせば、軒はかたむき簷子はくづれあさましい自然のいたづらをものがたる小さな祠がある」「さても海をわたつた旅人は、ぜひ丸山岬頭をおとづれ行き、そこに南無畜生頓生菩提の古塚を親しくとむらひ。併せて老人あらば野房の三吉丸山のお玉といふ傳説をたづねて見たまへ」〔野房の三吉〕「館山がよひの小蒸氣船が、もし富浦のみなどに入つたならば、忘れずに手をかざして左の方それと海にせまつた山のいたゞきに、書もなほもの暗くわだかまつた大きな一本の松を見出すまで目伸して見玉へ」〔樹が池〕といった視線である。馬車ならば茶屋のあたりで停まることがあつただろうが、「寒い北風と俗悪な世間とを隔て、大藩屏のごとく天にそり立ちしかの大鋸山に、頃者文明の鼠は隧道といふ穴を穿ちつゝあり」（岡本剛南による「序」と、独自の鉄路を切り開く汽車の窓から伝説の事物を見出すまで目伸して見」）ことは不可能だ。伝説の語りは一面に広がる景色の中に中心を発見させる。見出だす間が必要な語りである。もちろん、山の背比べのような汽車の窓からの視点にあっても喚起される伝説もあるはずだが、「騒々しい響きにかき素されて」聞くいとなみが制限されるためもあつて、伝説が鉄道と出会つた時に、鉄道の旅に晒される身体は伝説の声を発するのに適したものではなかつた。(注13) 他にも、「長狭といふのは古い言葉であるから不審がられるかも知れないけれど、大山村の平塚と、しづかに土人に問はゞ、やさしく教へてくれるであらう」（「寅卯の雨」と『安房の傳説』は

歩くこと・立ち止まることを繰り返し読者に奨める。擬似的であれ、安房の道のりを辿り、土や海に触れる身体から「老人」「土人」の声を書き留める聞き方がなされるのである。

一、日本を見渡す伝説集の視点

同じ頃、藤澤衛彦が『日本傳説叢書』の刊行を開始し^{（北武藏の巻）}『日本傳説叢書』の刊行が大正六年四月)、『安房の巻』は大正八年三月に刊行されている。序文で三十四番の札所に触れ、保田から内房を館山まで南下した後に外房を北上する配列であるにも関わらず、房総半島の景色が想像されない。「野房の畜生」も「松林の中にある小やかな祠は、この狐を祀る祠であつて、開運の祈りを捧ぐる信者をつないでゐるといふことであるが」と事物の存在をあつさりと告げるだけである。「緒言」の冒頭に「安房國には、英雄傳説系統の傳説が非常に多い」と明言するとおり、全國の伝説を分類する一環として、目次では各伝説に「○○傳説(数字)」と分類ごとの番号も付される（例えば『安房の巻』の（一）「安房國—安房の名義」は「地名傳説（二三六）になる）。日本全國を見渡す視点から見た安房の伝説には、伝承地の地名が正確に示される一方で、海に迫る山の尖さも潮の香りも練り込まれてはいない。その視点は、白地図の上に伝説の種類によつて全國を結ぼうとするものであり、拡がる鉄道路線を鉄道「網」と見立てる視点と重なるものもある。そして、その視点は出版によつて全國の讀者に配信されたのだった。

今日でも、この視点は研究の基本的な目的の高さとなっているが、それは決して唯一万能の視点ではないだろう。分類とか分布とかを主眼にすれば、必然、土地から引き剥すしかないわけであり、「型の登録」は白地図を広げて行われる。一九七〇年代に第一法規出版が発行した『○○の伝説』では各巻の編著者がそれぞれ伝説を分類して収載している。巻末に市町村ごとの索引を付すものの、切り取られた伝説に躍動感を回復させることはできない。これとは対照的に分類をせずに道順で編集したものが角川書店の『○○の伝説』(「日本の伝説」シリーズ・昭和五十一年)になるが、伝説の魅力は「○○伝説散歩」の章を前半にもうけているこちらの方が感じ易い。民話ブームの頃でもあり、「エキゾチック・ジャパン」等の観光消費が行われた頃もあるから、より強く流通が意識された結果なのだろうけれども、土地の匂いを消去した標本のような伝説に一般的の読者を引きつける魅力はないという点は認めざるを得ない。^(注14) 分類された伝説には資料末に括弧内の伝承地が申し訳程度に記されているとはいっても、その多くは机上に広げられた日本地図にカードをビン留めるためのもの、書斎に固定された視点から全国の伝説を均質に見渡す番地として利用するためのものだった。私達が聞く郷土史家と呼ばれる人達の語りは、自分にとって大切な土地の豊かさを発掘してゆくいとなみなので、また、その土地のことを聞きに来た私達に向けられる言葉であるためもあって、書物によつて全国を見渡す視点を得ても、土地を手放すことはない。

『安房の傳説』は、鉄道旅行が要求する身ぶりと、それまでの房

州旅行に馴染んでいた「船に乗る・歩く」身体との間に発生する違和感を先取りしていた。歩き方の変容にさらされた、立ち止まらなければ発見されない小さな照準の要求に促された出版だったと言うこともできる。こうした土地の語りの訴える違和感は、伝説の内容のみを取り出して全国を見渡そつとする視点まで届くものではなかつたし、届いていたとしても「伝承が減んでいく」という決まりきつた物言いに整理されてしまつたのだと思われる。やがて鉄道は盛衰し、道路もかつてのそれとは姿を変えた。そして、いつの間にか聞き方も随分と変わっていた。その場で聞き、書き留めるだけではなく、録音を再生して言葉を聞き取ることもする私達の聴覚は、伝説に寄り添う道のり、あるいは歩くこと再び出会い始めている。^(注15)

三、地域を語る際の焦点

そもそも、土地を語ることの満足感は、自らの根を地に伸ばしてゆく手ごたえを源泉とする。^(注17) だからこそ旅行に出ようとする時や客を迎えるとする時に、地域の伝承が顕在化し易いのである。土地の語りとして聞き取れば、伝説が言葉にされる際の表現にも、周辺の世界に焦点の定まつた動脈をつくつてゆく様子が浮かび上がる。

『安房の傳説』の冒頭が巡礼の道のりであることは既に紹介したが、「第一編」の十一番め「加世越之助」では「先づそれにかゝはる里見義實が、わが房州に亡命するまでの轉變をものがたらねばならない」と、『里見志』の内容に触れ、二十四番め「黒龍」では里

見義豊の妾倉女隠栖の地を手がかりに、天文二年（一五三三）の里見氏の内訂を克明に描いている。さらに十四番め「頼朝が跡」では「わが房州にのこされた遺跡を、それぞれ案内して行きたいと思つてゐる」と頼朝が安房の龍島に渡つてからの道のりを詳述する。年表に整理するだけでは、歴史を生活の奥行きにすることはできない。自らの身体を歴史のうねりに投げ込み、目の前の山から向こうの山へ、夜になつてこの道を、といつた具合に物語を経験することによつて、歴史は世界の厚みとなつてゆく。

勿論、こうした表現は安房という地域に限定されることではない。文学作品にも確認することができるが、ここでは「歩くこと・聞くこと」にこだわつておきたい。例えば、八幡太郎源義家の伝説を聞くのが、さほど難いことではない福島県中通り地方の場合。私達に伝えられた言葉のまま提示しよう。

ここには馬場平つて畑あんだけど、その畑は馬の運動場みたいだつたんじやねえ。八幡太郎義家の頃の。ほして、そこの八幡館つていう山。そこに八幡太郎の家来、そのときには登つた山で、館にしている。八幡館つてなつてるんだわね。今でも。それで追いかけらつてきたからつて、この山さ登つたつて、わかんないよう後に後ろ向きになつて山登つたんだつて。山から下つてようみせるために。そして、莊東つていうこの前

の集落。そこは着束を替えたから莊東。（昔は着物のことを装束つていつたでしょう。）山から逃げてきて、そこさ行つて、ボロボロになつたあれを着替えて。そこから前に行くと矢造で、

集落あんだ。そこに行つて、また矢を造つて。負けて追われたから衣もボロボロになり、矢造で兵を整えて、下つていつて。双里つてどこには、返り見桜つていう大きな桜あんだわね。わからねえで通つて、つと振り返つたら桜がきれいに咲いていたんで、見返り桜にただつて、そういう話だね。⁽¹⁸⁾

地名が伝説を喚起するのは言うまでもないが、隣の集落、そのまま途上にも敗走する義家が出現し、その存在感が現在の風景の中に染み出していく。逆に言えば、生活や地域を言葉にしようとすると、地名の由来が結ばれ一連の物語が構想される時、その道のりの何かしらの焦点が不可欠であり、伝説も含めて、地域に根ざした話をしていると、その焦点としてしばしば、話し手と聞き手との間に道が結像し、話題はその道を行き来する。知識も出来事も言葉にされるにあたつては、その道に導かれる。現在の風景と伝説の風景とが、また、あの日の風景とが、その過程で擦り合わされ、世界の奥行きとなる。史実も伝説も苦勞も経験も、その道を通ることによって物語を生成してゆくのである。

四、言葉にされる変容

物語に描かれる道のりが現在の風景に重ねられ、生活を豊かにしているのとは裏腹に、実際の生活空間に存在する道と私達との関わり方は、かつてのそれと同質のものではなくなつてている。

——(妻) そんな時は夢中だつぱね、ばかにしらつちや時は――

だいたい、そういう箇所はもともと狐の住みかだつたんだね。今でもやつぱり、この辺だつて、そういう住みか、夜通つと気持ち悪いよ。いるよ、狐だつて。ぞ一つとするよ、頭から水かけられたみたいに。だいたいそこ通るのが、狐の巣、そういうとこ通るなあつていうの前々から頭にあるから、ぞ一つと。今は自動車なんかで通つから、そんな感じわからんねえけつちょも、昔は歩いて通つたから、何かおみやげ背負つて通つたりすつと、油揚げか、御馳走よばれて御馳走いっぱいもらつてきたつたりすると、その御馳走……、空の風呂敷背負つて歩つて、中身はなんにもなかつた。

——(妻) みんな狐に食われつちまうんだつぱい――
(注19)

土地との接触のない鉄道や自動車に身を預ければ、地点を語ることとは難しくなり、狐に対して「ぞつとする」こともなくなつていく。車内に身を置くと、景色は線で構成され道の輪郭と共に消失点を目指す。近景は流れ去つてしまうのだ。けれども、人々がその土地での生活を厚みをもつて描こうとする時に、土地の手触りを捨て去ることは難しく、世界の焦点として被写深度の深い、線で描かれた道が話題にのぼつてくる。

日中の渋滞が解消されない千葉県船橋市を中心部を舞台にする地名の由来を引用する。

昔は、家のお爺ちゃんなんかも、世話をだからみんな集めて成田詣で行つて、今でも行徳凄いでしょ寺町、妙典通つて、田

尻にありますよね日本橋の金持ちが建つた石碑なんか。

で、船橋行つて、船橋の八べえつてどこでもつてさ、なんで八べえかとおもつたら、女郎屋なんだよね。女郎屋があつたんだよ。で、「行きにしへえか帰りにしへえか、ああめんどくせえ両方しへえ」っていうんで八べえになつちやつたんだつて、これはほんとうだか知らねえよ。「四べえ四べえで八べえだ」っていうけどね。そんな話もね聞いたけどさ。

——ああ、それも一つの方言ですね「しへえ」なんて。「行きにしようか」って意味でしょうかねえ? (調査者)

そうやつたですねえ。「しへえか帰りにしへえか」つてね。だからね「いやんじや両方にすんべえ」つて、「八べえ八べえ」つつんだけどさ。地名が八べえつていうんですよ。

今ほら全部道路の道筋も変わつちやつたしね。旧道が、(船橋)大神宮真っ直ぐ向かつている道でしようあれ。今あの道は車混んじやつて、通れなくて、バイパスね、競馬場の方へ行く道が盛んに通つて、今あつちが道路になつちやつたんだけどさ。

成田山詣での話から経由地の船橋の「八べえ」の名称の由来、さらには船橋への道のりと、話題は成田街道づたいに市川に戻つてくる。資料の結びは「旧道」の道のり。道は、心の中にイメージされる自分の世界の地図にも、紙に書かれた地図にも、焦点となる線として書き込まれる。そして「旧道」には他の道には与えられない意味が付加されていく。「旧道」を知らなければ地域での生活が自由にならない場合もあるし、初対面の相手に「昔の暮らしの様子」を尋

ねられれば、話題にしやすいものもある。

——このおうちのお生まれで?——

そうです。

——じゃあお聟さんを……。だいたい子供の頃から、この辺の景色を見て……——

ええ、そうだね。かわつちやつたからね。道路も、昔は、こ^こ、うちの前の道路が、これが県道だったのね。

——ああ、僕が今歩いていた道ですね——

——ここを、バスが通つたり、いろいろして、やつてたの。今から二十何年、二十、四五年前に下に道路ができるんだわね、耕地整理をして、車、この集落^(ヤシキ)に用のない車は下を通るようになつて、こここんところは、ほんとの、この集落^(ヤシキ)に用のある人だけ、そこに会社があつから、そこに来る人ぐらいい……。

「旧道」は、ただ通過するだけの道ではなく、そこには人が暮して^(注25)いる、物語を生み出す道だつた。耕地整理後の直線^(注26)道路は、目的地への直行を強く指向し、そこには地域に暮す人々の声が届かない。車の登坂のためにつくり直した峠道にも。だから、峠を越える貨物の輸送が新しい道に委ねられた後も、小間物屋は三次郎(三重県熊野市に伝承される笑い話の主人公)と出会うために、つまりは立ち止まるために、一人で「旧道」を歩いていかなければならなかつた。その次はな^{ムカシ}、大阪から小間物屋が来た。汽車有るんやなし、あんた。車言うたら金の車やしの。もう、新宮で暫く売りよつてからこんだ、飛鳥の方へずっと行くのに、昔は、

佐田坂やなしに評議の坂^(注27)言うのあつたんや、急な坂。佐田坂出来てからまあ、樂じやけんどのお。評議の坂あつて、旧道あつたん。旧道行くとだいぶ近かつた。ところが、小間物屋、やっぱり車、置くから、荷物持つてきた、車引き何十人出てきていつて来たわ。その人に荷物を、小間物屋^(注28)言う商売は、物数よくあるさかいの、評議の坂だに、乗つて持つて行けれんのじや、物えらいから。車引きに帰りの車引きに頼んでな、飛鳥辺の宿屋まで送つといておいてもろて、そいで自分は旧道を歩いて行つて商売する。^(注26)

五、自らの世界を描いていく物語

円滑な交通を求めて道はつけ替えられていく。その都度、土を手放すまいとする語りの欲求と、自らを歴史の堆積の中に位置づけたい願望^(注27)とが「旧道」の語りを湧きおこさせる。かつては新しい道だつた鉄道もつけ替えられる。近代的な機関に移動を委ねた身体が経験する、風景の劇的な変換を知らしめた昭和初期の「国境の長いトンネル」^(注28)も、現在では上り線用に使われており、雪国には抜けなくなつてゐるそうだ。古い街並みを避けた道は直線的になる。山越えを容易にするために切り通しは深くなり、坂はなだらかになり、トンネルは長くなる。こうして、鉄道や自動車の、目的地と出発地とを直に結ぶ性質^(注29)は一層強調されていく。^(注30)立ち止まつて一点に焦点を求める語りは難しくなる。鉄道や自動車によって拡大した自分の

世界の支えとして馴染みやすいのは、線路や道という帶状の流れの中で遠景や駅名を情報としながら各地を結んでいく語りなのだ。

体験談の中で、戦地から家までの細かな、道のりの語りに出会うことがある。軍隊の一部に位置づけられていた身を自分の世界の中に

心に位置づけ直す物語として、復員のあゆみを手放すことは許されない。我が家まで、手探りの道のりを経験することによって、彼ら

は手足の感覚で確かめられる世界の外側に運ばれてしまった我が身を、世界の中に取り戻したのだった。自分の生い立ちと戦後の自分を結びつけるには自分を回復した物語を必要としているのだろう。

あるいはまた、交通機関の発達は郷土史家にも日本を見渡せるようになつた。例えば「頼政塚」を墓地としていた人物が、頼政最期の地と伝えられる各地を訪ねて歩き、他の伝承の担い手との交流を深めていることなどを具体例にできるだろう。彼はそうした活動の中で、頼政の首が埋まつていると伝えられる土地には、川崎・竜崎・竜ヶ崎・高崎といずれも地名に「崎」がつくことを発見している。

郷土史家の言葉の中にも、自分の管理する伝説と関連する各地の伝説を検証して歩く（あるいは歴史研究をする）自らの姿が描き込まれている。口述の生活史として聞くことも可能なその物語が、全国を旅した英雄の物語に擬せられているようにさえ、私には感じられる。伝説が、もしくは地名が、言葉にされる際に各地を結びつける物語を希求するとするのだとすれば、各地の伝承を訪ねて歩く自らの物語をも、その希求が副次的に生産していくことになる。事物や地名は、それぞれ物語を内包すると同時に、それらを結ん

でいる物語の世界、身体の感覚が支えとなつている各人の物語の世界をも構成している。歩くことによって、あるいは道などの媒体によって、そうした物語の世界が換起されるのである。

六、自らの世界の物語と地図

ところが当然のこととして、身体の感覚として土地を語りきれないそな場合もある。そういう時に私達が頼る媒体、それが地図である。地点と地点との関係は地図によって全く違つた理解をもたらす。前にも触れた角川書店の「日本の伝説シリーズ」がもうけている「○○伝説散歩」の章では各地区ごとの扉の頁はルートを示す地図で飾られている。伝説の事物を結んでいく魅力と、こうした物語によつて彩られる世界を自分のものとして確かめてゆく自らの物語とが、眼に見える形で、そこには示されていることになる。

さらには言葉として私達に伝えられる伝説にも、地図を利用して説明がなされる場合が生じてくる。『滋賀県湖北昔話集』^{〔注33〕}の中には六十三例の「夜叉ヶ池の伝説」が収載されている。池の所在地の案内から始まる資料の冒頭部分を二例引用する。

「夜叉ヶ池の伝説」（浅井町北野の明治27年生・男性の場合）

こつから行く、夜叉ヶ池行く道ここにあるんやさかい。^{〔注34〕}こつは滋賀県浅井町の北野といいますんや。そんで、ここ行くと、すつと、夜叉ヶ池の、夜叉ヶ池は福井県ですのや。そこで、岐阜県と福井県と滋賀県と三つ鼎に池がある。そこに竜神が住ん

で、ついで、あの、滋賀県、その童神に頼むと雨を降らしたと言ふんですね。それが行く道は、こっちから山道通つて行けるは行けるけどなあ。やっぱ福井県クルワから北へぐるつと北陸線を行つて、今庄ちゅう駅ありますんや。今庄から南へ入つてくと、この滋賀県とそして岐阜県。あそこは、あそこは揖斐郡じやな。岐阜県揖斐郡坂内村、字、ん一ゆう、ん一ちょっとと思い出せんけど。そして、そこから後上がりませんや。

「夜叉ヶ池の伝説（浅井町池奥の明治40年生・男性の場合）

岐阜県がここで、福井県がこうきどる、滋賀県がこうで、ずっと北やな、ここに夜叉ヶ池つて池があるのや。盆地の低い所があつて、五百メートルも八百メートルも上、盆地の上に池ができたんやろうな。

（傍線は野村が施した）

前者が地面に接する視点から聞き手を夜叉ヶ池に誘導しようとするのに対し、後者は夜叉ヶ池を俯瞰する。身ぶりを伴つたことを示す傍線部の表現は、聞き手との間に（それが手の動きだけであつたにせよ）地図が描かれたことを示している。簡単に近づける場所ではない夜叉ヶ池を射程に入れる手段として、前者は鉄道（北陸線）という脚を用いて山の反対側へ視点を移動させていくのに対し、

後者は地図という見下ろす眼によつて、迂回せずに現場へと向かう。どちらにも土地を語る身体の拡張が認められる。聞き手との間に世界が構築される際に、脚によつて葉脈として線が描かれ、空からの視点によつて輪郭として線が描かれる。その眼に映る景観は実際の土地に刻まれているわけではない。また、県境が生活に大きな影響

をもたらすこともないかもしれない。けれども、夜叉ヶ池が語られることによつて三県の配置が手中におさめられる。地面に近い視点であつても、俯瞰する視点であつても、伝説の言葉は物語の舞台になる夜叉ヶ池に焦点を合わせていくのだ。全国の伝説を分類していくとする視点が全国を均質に見渡そうとするのとは違つて、この俯瞰は明らかに夜叉ヶ池に焦点をもつており、標高や地形の情報が夜叉ヶ池の景色に興行きを与えるために用意される。

地域を語るために、物語の理解を促すために、地図が用いられる一方で、地図は物語との関係を反転させる。物語が地図〔注34〕を介して表現されるのではなく、地図の中に物語を読み取らせるのである。

沖縄戦は山の形さえ変ええた激戦でしたから、廃線跡らしきものなどほとんど残つていません。それでも地図でルートを辿るのは非常にたやすかつた。なぜなら鉄道には「曲線美」がありますから。道路ならまつすぐ敷かれるけれど、鉄道は地形の勾配を避けたりしながら、微妙なカーブを描きます。急カーブもできないので独特的の緩やかなカーブになるわけです。その魅力

は鉄道好きな人には分かるんですね〔注35〕（笑）。

均質に描かれた地形図の中に廢線跡という焦点が出現してくる。

「跡」が喚起する物語によって、写し取られた世界の中にも照準をつくり、もはや描かれてはいない、失われた線（旧道）を読み取る。時刻表の無機質な数字の中にさえ物語を見いだせる人々にとつて地図（等高線で描かれる世界）を読むことなど朝飯前だらう。

『安房の傳説』も、「日本の伝説シリーズ」も、少々視野を広げて

文学散策、歴史散策、古道探索、様々に出版される書籍も、実はその書籍を手にすることを歩く代償として満足感を得た人は少なくなつたことのない土地であつても、粗削りながら自分なりの風景が描かれて、その土地は自分の世界の一部となる。風景あるいはランドマークが物語を招来するのだととも、その物語によつてこそ風景は風景たり得るのだし、ランドマークは焦点であり続ける。

七、地域の物語と身体の移動と

『安房の傳説』は鉄道という新しい道の開通に刺激されて湧出した「旧道」が抱えている物語だった。目的地に向けて駆け抜ける鉄道の旅（周遊）を目の前に突きつけられた巡遊という安房の歩き方（「旧道」の語り）が、各地点の焦点を伝説集としてさらけ出したのである。冒頭でみせた、自らの周辺を書き（歩き）自らの根っこを確かめる（立ち止まる）態度は、そこに描かれる安房が、均質な全国地図の一部をなす安房ではなくて、羽山が手探りで確かめた安房、彼の世界であつたことを明らかにする。それでいて、「京房通報社」という発行所の名が示すとおりに、結んでいこうという意志に、その出版が促されているのも隠せない。すなわち、新しい媒介に接した土地の語りが、立ち止まつて掘り起こそうとする視点と、走りながら線を描こうとする視点との間を往復しつゝ、文字として世界を構成し始めるのである。平面である紙に書かれた安房国ではある

が、脱臭されて分類された資料ではないから、読書という身ぶりを通して、あるいは実際に周遊旅行する身体の感覚に補完されながら、文字が、地図が、奥行きのある安房国を新たに描いていたはずである。伝説を物語る心地よさ、充足感に支えられながら。

『安房の傳説』から九十年足らず、羽山が嫌つた内房線のさらに山の中に高規格一二七号線（富津・館山道路）が開通する。「県都一時間構想の実現」^{〔注37〕}が達成される時、それは千葉から館山まで、内房を旅する身体から海が見えなくなる時でもある。鋸山を抉つたトンネル等、その一部区間の開通を目前にした平成十一年春、二百年近く前に測量して歩いた伊能忠敬の物語を携えた伊能ウオーケ^{〔注38〕}が、やがて旧道となる国道一二七号線を南へと歩いていつたのだった。

〔注〕

(1) 現・館山市北条の表記は、本稿では「北條」に統一する。

(2) 羽山による「冠詞」の後半。対句の部分は改行されている。なお、本稿の引用ではルビは原則として省略した。

(3) 『安房の傳説』の「第一編 安房の傳説」(一頁～三〇四頁)は三十九の伝説で構成され、「火を吐く島」は六番め、後に引用する「野房の三吉」「舛が池」「寅卯の雨」は、それぞれ五番め、八番め、十六番めの伝説である。

(4) 無論のこと、鉄道を大歓迎する立場もある。例えば、大正六年十一月に発行された『房州見物』(著作兼発行・磯谷武一郎)は鉄道の開通が早かつた外房から伝説の地などを訪ねながら安房を

一周りする（磯谷は外房の鳴川の人）。「驛夫の聲に愕然として覺むれば身は何時しか蘇我驛・北條線と勝浦線との分歧點に在り。

さては、まどろみとおぼし。今朝兩國を發する時は、さのみの乗客にもあらざりしに驛毎に加はりてか各等悉く滿員」の書き出しがわかるように鐵道による地域發展の期待が強く感じられる。また、「女中のおしづ婆さんに聞けば市原郡五井町を起點とし小

湊を經て天津町に至る小湊鐵道の更に天津より鳴川迄延長するを測量の技師さんであるとのこと。小湊鐵道といふと雖も、軌道は

スタンダードゲージに依り、車輛萬端毫も標準鐵道に異ならず。（略）と、一人の技師は語る。愈々鳴川迄延長すとならば此の外房の漁獲物の輸送は勿論小湊山より清澄山、小松原、波太島と日蓮

の靈地を訪ぬる人々の便いと多からん」というような記述もある。郷土史家の語りがしばしば郷土の、特に交通網の将来像に及ぶ点については、拙稿「史話」（注6）に触れたことがある。

(5) 青木栄「鐵道忌避伝説に対する疑問」（『新地理』二十九卷四号・昭和五十七年・日本地理教育学会）。

(6) 鉄道忌避伝説の語られ方は、拙稿「史話—地域を語る文芸—」（『世間話研究』八号・平成十年・世間話研究会）も参照。

(7) いくつかの図書館の蔵書を確認したが、破り取られた頁のあるものが多い。この広告が有効だった証といえるかもしれない。

(8) 田部重治『わが山旅五十年』（昭和三十九年・桃源社／平成八年・平凡社ライブラー）によれば、明治四十一年七月に慢性

氣管支カタルの診断を受けた田部重治は汽船で北條に渡り三週間滞在した帰り際、肺を病んで転地療養する中学（富山）時代の同

窓生に声を掛けられている。ちなみに、田部は北條からの帰路、利根川の汽船に乗船する銚子までの大部分を歩いている。

(9)『南総の海と大原』（白石強太郎・大正二年・吐虹會）の「序」に島村抱月は次のように記す。「旅行案内記の理想的なものと言へば、文藝的の一面と數理的の一面とが完全に調和したものでなければならない」。鐵道によって持ち込まれる「時刻」の感覚も立ち止まること・聞くことを不自由にするものだつた。

(10) 例えは、大正七年八月に刊行された『安房國札所巡拝案内記』（神作有智著・福満寺執事発行）の巻末広告には海から離れた平群村（現・富山村）や瀧田村（現・三芳村）の旅館を載せるが、『安房の傳説』にはこうした地域の広告はない。

(11) 今日では、房州へと向かう特急列車は靈岸島付近の地下を通過するようになつた。乗客は暗闇を背景にするガラス窓の上に自分の姿を見るだけである。

(12) ヴォルフ・ガング・シヴ・エルブ・シユ『鐵道旅行の歴史』（昭和五十七年・法政大学出版局・加藤一郎訳）や佐藤健一『風景の生産・風景の解放』（平成六年・講談社選書メチエ）等を参照。

(13) 汽車の窓に映る風景については柳田國男も関心を示している。「旅人の為に—千葉県觀光協会講演—」（昭和九年五月四日・初版本文末）『豆の葉と太陽』（昭和十六年・創元社）等。

また、通勤する車内で記された昔話を出版したものとして『山国の大夜廻し』（扉書『昭和四十六年』）がある。この昔話集と伝承者宇佐美省吾とについては高木史人「口上・自由日記の昔話集」（日本口承文藝學會第三十六回研究例会）などの論攷がある。

(14) 伝説の地を歩く書籍のひとつに福田晃『京の伝承を歩く』(平成四年・京都新聞社)がある。これも『京都新聞』の連載として読者に向かいあいながら、伝説的魅力を確かめたものである。

(15) テープ録音という聴覚が昔話研究に与えた影響については、高木史人「[昔話の語り手]」の「九〇〇年」(『承文藝研究』第十号(平成七年・日本承文藝學會))を参照。

勿論、言葉を録音するのは民俗の研究をする者だけではない。福島県中通り地方某村におけるテープ活用の例を紹介する。

【テープ起こし資料「ワカサマ】

「頼むと、神棚の前さ行つて、神様の前さ、立派に飾らつてゐるから、神様、そこさ行つて、こう、頼むわけ。そうすつと、その、頼んでるワカサマにのり移つてくるわけ。だから、神様が言つてゐることを、そのワカサマが拝み拝み聞いてくと、のり移つてきて、しゃべつてるわけ。それを、我々が、例えば我々が聞く時にも、しゃべつてる事みんな聞き取つて……。今は良いあれがあつて、あの、テープなんか持つてつて、全部聞き取つてくる、ああだ、こうだつて。そうすつと、帰つて来いろいろ検討してみつと、まるつきりうそでもねえなあ」。(昭和二年生・男性・農業)

(16) 調査資料のテープ起こし提示については、諸々の立場があるが、資料の信憑性を高めるとか、資料の背景を知るとかいう意味ではなくて、「土地の物語や個人の物語などによって塑像される表現」全体を捉えられる方法として、私は丁寧に扱っている。

(17) 拙稿「自動車が走る暮らし—道路・生活・世間話—」(『世間話研究』九号(平成十一年・世間話研究会))より。

(18) 「義家伝説」福島県石川郡石川町にて。大正七年生・女性・農業)。『石川郡のざつと昔』(國學院大學説話研究会内ざつと昔を聴く会編・平成三年)

(19) 福島県西白河郡大信村にて。昭和二年生・男性・農業。

(20) 注(17)に同じ。

(21) 「船橋の八べえ」(昭和十年生・男性・農業)『市川の伝承民話第七集』(市川民話の会・平成十一年・市川市教育委員会)

(22) 『朝日新聞』平成十一年六月八日千葉面の「のんびり歴史街道 成田街道②」(文・イラストさいとう・はるき)の記事とつき合わせると、このテープ起こし資料は一層わかり易くなる。

(23) 私の生活する千葉県市原市にも「旧道」があり、東京都や埼玉県出身の私の仲間内でも日常会話の中で「旧道」の呼称は頻繁に用いられるが、道路標識や道路地図に「旧道」の文字は見たことがない。「旧道」は人々の生活感に根ざした表現なのである。

なお、この道については『朝日新聞』平成十一年「のんびり歴史街道 房総往還③(5)」(③三月十六日、④同三十日、⑤四月六日、いずれも千葉面、文・イラストさいとう・はるき)を参照。

(24) 福島県西白河郡大信村にて。昭和ひと桁生・女性・農業。

(25) 近代の精神と直線・直角との関係についてはル・コルビュジエが説明している(『ユルバニズム』・昭和四十二年・鹿島出版会／SD選書・樋口清訳・原著一九二四年)。

(26) 「小間物語とヤロ」(明治三十五年生・男性)・梶晴美「笑い話の主人公—三重県熊野市の佐渡の三次郎話をめぐって—」(『世間話研究』九号・平成十一年・世間話研究会)より。

(27) 歴史に寄りかかるうとする意識が間違いなく私達の中にある。

一年来「特別現地ご見学会」開催の度に、我が家の新聞に折り込まれる「千葉市内好環境園」の広告には、こんな言葉もある。

「昭和の森、泉自然公園などが近く、墓参の後には、お子様連れでは是非お寄り下さい。土氣城跡、土氣城主墓所隣接」。

(28) 川端康成『雪国』。

(29) 高取正男の著作には「中間をカットした交通形態」を取り上げたものが幾編あるが、「近代以前の生活文化の実態を明らかにするため、さまざまな民俗事象を考察の対象にするとき、それらが明治以後に受けてきた大きな変動の跡を、私たち自身に直接にかかわりあいのあることとして充分に吟味する」(『民俗のこころ』昭和四十七年・朝日新聞社)ことを立脚点にしている。

(30) 平野馨『房総の伝説』(昭和五十一年・第一法規出版)では、真間を舞台にした「浅茅が宿」の頁に京成電鉄市川真間駅ホームの駅名表示板の写真を掲載している。書物や地図などの紙の上でではなく、現実世界の中に、不自然なまでに大きく読みやすく掲げられたその地名は、車窓からの読み取りを前提にそこに存在している。土地との接触が弱い媒体だからこそ、土地の情報が視覚に凝縮して提示される。地名を視覚のみによって確かめるのも鉄道や自動車に閉じ込められた身のこなしである。本文で触れたように『安房の傳説』は歩くこと・聞くことを読者に奨める。

(31) 注(6)に同じ。

(32) 注(22)(23)に示した『朝日新聞』の連載も、言葉と地図と目の高さからのスケッチとで構成されている。また、示した事例

の内容がこの記事によつてわかりやすくなるという私の施した注記自体が地図の持つ説得力に頼つてることになる。

(33) 國學院大学説話研究会編・昭和六十年。昭和五十八年夏に、滋賀県伊香郡余呉町、木之本町、東浅井郡浅井町の一九二名から聞き取り調査。なお今回の引用では漢字表記を改めた部分がある。

(34) 平成十一年八月二十六日の『朝日新聞』「天声人語」は次のような説話を紹介する。「当時のチャーチル英植民地相は、ヨルダンとイラクを人工的につくった。彼が地図に定規で国境線を引いていたとき、くしゃみだか、しゃつくりだかが出た。はずみで線が曲がつた。ウソかマコトか、そんな伝説がある。両国のまつすぐな国境に、なるほどピヨコツとくぼみが見える」。

(35) 「海上廃線旅行の楽しみ」宮脇俊三(聞き書き・相馬千穂)『旅』第七十三巻第四号(平成十一年四月・JTB)。

(36) 『安房の傳説』には「地理にうとい初めての訪問者の便利をはかつて、一枚の地図をさし拵んだ。その地図に印して、わが一國一郡の房州の山野を、到らざるなく跋渉しつくして頂きたい」(『朝寝の觀音』)とあるが、その地図は確認できなかつた。

(37) 『安房郡市第二次新広域市町村圏計画 第一次基本計画』(平成八年・安房郡市第二次新広域市町村圏事務組合)による。

(38) 「平成の伊能忠敬 ニッポンを歩こう 21世紀への100万人ウォーク」(朝日新聞社・日本歩け歩け協会、伊能忠敬研究会主催)。安房を歩いていた期間は二月三日～八日、道幅の狭いトンネルの続く内房の一部区間は電車を利用。

(のむら・のりひこ)／和洋国府台女子高等学校非常勤講師)